国語

4年　組分⑧

解　答

1　1　非公開　2　無限　3　効く　4　財産　5　風紀
　6　物価　7　航空　8　節句　9　仮説　10　囲む

2　問一　1　**とら・ウ**　2　**こうや・イ**　3　**まご・キ**
　4　**たいぼく・オ**　5　**はな・ク**　6　**くり・ア**（それぞれくんで）
　問二　1　**オ**　2　**ウ**　3　**ア**　4　**エ**
　問三　1　**ア**　2　**ウ**　3　**ア**　4　**イ**

3　問一　A　**ウ**　B　**イ**
　問二　**恩返し**
　問三　**イ**
　問四　**エ**
　問五　**誰もテストをしてくれないので、自分で力を試したり伸ばしたりするチャンスを作らないと成長できなくなり大変だと考えている。**
　問六　**知識や経験**
　問七　**イ**

4　問一　1　**芋畑**　2　**取ってきて**
　問二　1　**岳・健二郎・昇**（くんで不順可）　2　**ア・エ**（くんで不順可）
　問三　**ア**
　問四　**ウ**
　問五　**イ**
　問六　**エ**
　問七　**芋を掘りおこしたことが悪いことだとわかり反省する気持ち。**
　問八　1　**つつましい生活**　2　**気負い**
　問九　**そしてその**
　問十　**98**〔行めから〕

解　説

3　出典は、天野篤「自分を応援してくれた人に働いて恩を返す」（宮本恵理子　編著「大人はどうして働くの？」〈日経ＢＰ社〉所収）。

問一　A…空欄の前に「ものすごい額の税金が使われている」とあり、その具体例が「医者を目指す学生」に使われる税金ですから「例えば」。B…空欄の前は「たくさんの人の応援」で夢がかなうということ、直後は「恩返しをするのが、当然やるべきこと」とあるので「だから」があてはまります。

問二　筆者が考える「働く理由」とは、多くの人に支えられていることに感謝し、「恩返し」することです。

問三　筆者は「一人でも多くの人を救いたい」（19行め）、「救える命があったら、絶対に自分の手で救いたい」（21行め）と思って、心臓外科医をしているのです→イ。

問四　筆者は言葉で「ありがとう」と言うだけでなく、「みんなのおかげで身に付いた力を使って、『仕

事』で返して」（25行め）いき、「たくさんの人に喜んでもらえる仕事ができるように努力をする」（26行め）ことが大切だと考えています。

問五　学校の勉強ではテストがありますが、働き始めると「自分の力を試したり、伸ばしたりするチャンスを誰もつくってくれない」（30・31行め）ので、自分が「成長」する機会を自分で作らねばなりません。ですから、「かえって大変だ」（30行め）と筆者は考えています。

問六　「力試しのチャンスを自分から見つけてどんどんつかんでい」くこととは、つまり「知識や経験を増やすための努力を続けていくこと」（38行め）です。そうすることで「仕事の質は上がって」（38行め）いき、たくさんの人に恩返しできます。

問七　脱落文には「学校生活」「たくさんの人の力」とあります。これらに関係するのは、直前に「先生、一緒に勉強する友達」とある【イ】です。

4　出典は、椎名誠「岳物語」〈集英社〉。

問一・問二　「門灯の下に」ある「芋の小山」（99行め）を見て、わたしは「これを……どこから？」（1行め）と言いました。ふり返ると「わが家の前の芋畑」（6行め）が見事に掘り返されているのです。犯人である息子の「岳」、その友達の「健二郎」と「昇」の「三人組」は、すこしも悪いことをしたと思っていません。「うひゃ」と私がうめいたのも、私が芋の量に驚いているんだと得意になっています。また、「三うねそっくり」（13行め）掘り返した芋の量を誇らしく思い、自慢しているのです。

問三　健二郎君の母親は「いまにも泣きだしてしまいそうな顔」（18行め）をして途方に暮れています。私はそんな健二郎君の母親に同情し、なぐさめようとしたのです。

問四　勝手に掘り返した芋は、あやまって先方の農家に引き取ってもらうか、こちらで買い取るしかないのですが、問題は芋畑の主人の人がらでした。「このへんでも有名なケチで頑固者という噂」（29・30行め）で、しかも、子供が畑を荒らしたと言って文句を言いにきていたのです。これでは、解決するための話し合いがスムーズに進みそうにありません。

問五　畑の主は、作物は「こしらえているもの（＝作ったもの）」にしかわからない、つまり、作物の大切さは、それを育てたものにしか理解できないと言いたかったのでしょう。生育させる苦労や大変さを知っているからこそ、農家は作物を大切にしているということです。

問六　健二郎君の母親があやまる様子を見ながら、私は「すこしいらだってきて」（55行め）いて、「何もそこまで、決定的に卑屈になり、ひれ伏すこともない」（62・63行め）と思っています。

問七　帰り道の三人は空腹や寒さに加え、「どうも自分たちのしたことがあまりいいことでもなかったようだということがようやくわかって」（74～76行め）きたので、黙っています。

問八　私には、健二郎君の家の「つつましい生活に対してすこしでも力になれれば、という気負い」（95・96行め）がありました。

問九　妻は息子に「畑にあるものを黙って取ってきてはいけない」（114行め）ということをわからせるための「芋教育」（116行め）をしました。まずは、農作物は取った分だけ買わなければならないので、家には芋がたくさんあること、そして「ごはんは当分お芋ばかり」（122行め）になると「戦闘宣言」（123行め）してから、妻の「イモ攻撃」がはじまります。すなわち「料理は本当にすべて芋料理だらけ」（124行め）にしたのです。こうすることで幼い息子に、してはいけないことをしたのだと理解させたのですね。

問十　42行めから113行めまでの場所の変化を見てみると、畑の主の家→帰り道→私の家となります。